京大広報

No. 598　2005. 2

目次

〈大学の動き〉
「理系基礎教育・実験教育」ワークショップを開催……1838
博士学位授与式……1838
平成17年度入学者選抜学力試験（第２次学力検査等）の実施日程……1839
平成17年度入学者選抜学力試験（第２次学力検査等）の志願状況……1840
平成17年度概算要求内示概要……1842
〈部局の動き〉
寄附講座「免疫ゲノム医学講座」の設置……1843
森・里・海の再生教育に関するフィールド研と全日空の連携
ー大空に舞う森里海連環学ー……1843
エネルギー系21世紀ＣＯＥプログラムとタイ王国連合大学院大学・関係協力大学との合同による「持続可能なエネルギーと環境（ＳＥＥ）に関する国際会議」を開催……1844
エネルギー理工学研究所が「量子光・加速粒子総合工学研究棟」を開所……1845
第４回京都大学ＣＯＥ「元素科学」国際シンポジウム（兼第２回元素科学国際研究センター国際シンポジウム）を開催……1845
〈寸言〉
バーミヤーンの大佛像の再建はなるか
岩崎好規……1846
〈随想〉
現代確率論の発展を振り返って
名誉教授　渡辺信三……1847
〈洛書〉
フィールドワークのアップデート
杉島敬志……1848
〈栄誉〉
林　巳奈夫名誉教授，奥田昌道名誉教授が日本学士院会員に選ばれる……1849
中川久定名誉教授がフランス共和国レジオン・ドヌール勲章シュバリエ級を受章……1850
〈資料〉
平成16年総長裁量経費による研究課題……1851
〈話題〉
京都大学未来フォーラム（第８回，第９回）を開催……1852
〈訃報〉……1853
〈日誌〉……1855
〈お知らせ〉
河上肇記念シンポジウムと講演……1855
高等教育研究開発推進センター・第11回大学教育研究フォーラム……1856
〈編集後記〉……1856

「理系基礎教育・実験教育」ワークショップを開催
ー関連記事　本文1838ページー

京都大学広報委員会
http://www.kyoto-u.ac.jp/

大学の動き

「理系基礎教育・実験教育」ワークショップを開催

高等教育研究開発推進機構では，平成16年12月24日（金）・25日（土）の両日，コープイン京都において，教職員81名の参加を得て，理系基礎教育・実験教育の改善の取り組みとして，ワークショップを開催した。

このワークショップは１泊２日の合宿形式で，本学の理系教育に携わる教員が全学的な議論や意見を集中的に交わすことにより共通理解を深め，今後の理系教育の改善・充実に資するとともに，部局の枠を越えた教育体制の構築の場となることを目指した。

ワークショップは，基礎教育専門委員会委員長北村隆行教授の司会進行により，初日は丸山正樹機構長による挨拶およびオリエンテーションの後，村上忠幸京都教育大学助教授による講演「大学初年次の理科教育の課題－新学習指導要領を中心に－」に始まり，今回のワークショップの課題に関連し，林哲介副機構長から「理系基礎教育・実験教育」についての問題提起が行われた。

その後，「物理」「化学」「生物」の各科目に分かれ，分科会討論が行われ，夕食後も引き続き，分科会討論および全体でのフリー討論が夜半まで展開された。

二日目は，各分科会から前日の分科会討論の報告があり，最後に全体討論が行われた。

今回のワークショップは，高等学校の学習指導要領の改訂に伴う対応（2006年問題），理系基礎教育と専門教育との連携，実験教育の改善方策，法人化後の非常勤講師問題およびティーチングアシスタントの活用等，理系基礎教育が直面している課題について始終活発な議論や意見交換が行われた。

なお，このワークショップの内容は報告書としてまとめられ，各部局および参加者等に配付される予定である。

博士学位授与式

１月24日（月）午前10時30分から，時計台記念館において，尾池和夫総長，教学担当の理事をはじめ，各研究科長出席のもと，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各授与者に対し学位記（平成16年11月24日付，同17年１月24日付）が手渡された後，総長の式辞があり，午前11時30分終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。

学　　位	平成16年11月			平成17年１月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士（文学）	9	6	15	1	3	4
博士（教育学）	−	1	1	1	−	1
博士（法学）	−	1	1	1	1	2
博士（経済学）	4	4	8	2	−	2
博士（理学）	9	1	10	1	1	2
博士（医学）	4	−	4	9	1	10
博士（社会健康医学）	1	−	1	−	−	−
博士（薬学）	−	−	−	−	7	7
博士（工学）	13	4	17	10	12	22
博士（農学）	2	6	8	8	7	15
博士（人間・環境学）	3	−	3	1	−	1
博士（エネルギー科学）	2	−	2	1	1	2
博士（地域研究）	−	−	−	1	−	1
博士（情報学）	2	2	4	2	1	3
博士（生命科学）	1	−	1	1	−	1
計	50	25	75	39	34	73

平成17年度入学者選抜学力試験（第２次学力検査等）の実施日程

平成17年度入学試験（第２次学力検査等）を次の予定で実施する。

1．前期日程試験

月　日	教科等	学　部	時　間
２月25日（金）	国　語	総人「理系」・理・医・薬・農	９時30分 ～ 11時
		総人「文系」・文・教育・法・経済「一般」	９時30分 ～ 11時30分
	数　学	総人「文系」・文・教育・法・経済	13時 ～ 15時
		総人「理系」・理・医・薬・工・農	13時 ～ 15時30分
２月26日（土）	外国語	総人・文・教育・法・経済「一般」・理・医・薬・工・農	９時30分 ～ 11時30分
	論　文	経済「論文Ⅰ」	９時30分 ～ 12時30分
	地理歴史	総人「文系」・文・教育・法・経済「一般」	13時 ～ 14時30分
	理　科	総人「理系」・理・医・薬・工・農	13時 ～ 15時30分
	論　文	経済「論文Ⅱ」	14時 ～ 17時
２月27日（日）	面　接	医（医学科）	９時 ～ 17時30分
		医（保健学科作業療法学専攻）	９時30分 ～ 13時30分

2．後期日程試験

月　日	教　科　等	学　　部	時　　間
3月13日（日）	数　　学	総人・教育・経済・農（食料・環境経済学科）	9時30分 ～ 11時30分
		理・医・薬・工（地球工学科，建築学科，物理工学科・工業化学科）・農（資源生物科学科，応用生命科学科，地域環境工学科，森林科学科）	9時30分 ～ 12時
	論　　述	工（電気電子工学科）	9時30分 ～ 12時
		工（情報学科）	9時30分 ～ 12時30分
	国　　語	総人・文・教育・経済・農（食料・環境経済学科）	13時30分 ～ 15時30分
	理　　科	工（建築学科）※物理のみ	13時30分 ～ 15時
		理・医・薬・工（地球工学科，工業化学科）・農（資源生物科学科，応用生命科学科，地域環境工学科，食料・環境経済学科，森林科学科）	13時30分 ～ 16時
	論　　述	工（物理工学科）	13時30分 ～ 16時
	面　　接	農（食品生物科学科）	9時30分 ～ 11時30分 13時30分 ～ 16時30分
3月14日（月）	外国語	総人（独・仏・中国語）工（工業化学科） 文・教育・法・経済・医・農（資源生物科学科，応用生命科学科，食料・環境経済学科，森林科学科）	9時30分 ～ 11時30分
		総人（英語）	9時30分 ～ 11時50分
	論　　文	文・教育・医（医学科，保健学科検査技術科学専攻）・薬・工（工業化学科）	13時 ～ 15時
		法	13時 ～ 15時30分
		医（保健学科作業療法学専攻）	14時 ～ 17時
	面　　接	農（食品生物科学科）	9時30分 ～ 11時30分 13時30分 ～ 16時30分
		医（保健学科看護学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻）	13時 ～ 16時
		医（医学科）	16時30分 ～ 19時

平成17年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査等）の志願状況

志願票の受付は，1月24日（月）から2月2日（水）までの間に各学部で行われた。
学部別の入学志願者数は，次表のとおりである。

学　　部			募集人員	志願者数	倍　率	（参考）昨年度 募集人員	志願者数	倍　率
総合人間学部	前期		105人	362人	3.4	110人	377人	3.4
		文系	55	209	3.8	55	200	3.6
		理系	50	153	3.1	55	177	3.2
	後期		15	248	16.5	20	366	18.3
文学部	前期		190	562	3.0	190	629	3.3
	後期		30	449	15.0	30	430	14.3
教育学部	前期		40	150	3.8	40	162	4.1
	後期		20	211	10.6	20	189	9.5

学部			募集人員	志願者数	倍率	（参考）昨年度 募集人員	志願者数	倍率
法学部	前期		300人	922人	3.1	300人	905人	3.0
	後期		10	363	36.3	10	411	41.1
経済学部	前期		210	776	3.7	210	890	4.2
		一般	160	525	3.3	160	573	3.6
		論文	50	251	5.0	50	317	6.3
	後期		20	792	39.6	20	588	29.4
理学部	前期		280	833	3.0	271	841	3.1
	後期		31	889	28.7	30	882	29.4
医学部	前期		213	605	2.8	213	554	2.6
	後期		30	365	12.2	30	397	13.2
医学科	前期		90	324	3.6	90	352	3.9
	後期		10	162	16.2	10	238	23.8
保健学科	前期		123	281	2.3	123	202	1.6
	後期		20	203	10.2	20	159	8.0
看護学専攻	前期		63	110	1.7	63	90	1.4
	後期		7	73	10.4	7	55	7.9
検査技術科学専攻	前期		30	74	2.5	30	55	1.8
	後期		7	72	10.3	7	59	8.4
理学療法学専攻	前期		15	56	3.7	15	34	2.3
	後期		3	31	10.3	3	28	9.3
作業療法学専攻	前期		15	41	2.7	15	23	1.5
	後期		3	27	9.0	3	17	5.7
薬学部	前期		70	222	3.2	70	244	3.5
	後期		10	151	15.1	10	147	14.7
工学部	前期		857	2,166	2.5	857	2,323	2.7
	後期		98	923	9.4	98	1,006	10.3
地球工学科	前期		166	353	2.1	166	449	2.7
	後期		19	225	11.8	19	293	15.4
建築学科	前期		72	243	3.4	72	272	3.8
	後期		8	120	15.0	8	147	18.4
物理工学科	前期		211	539	2.6	211	558	2.6
	後期		24	195	8.1	24	181	7.5
電気電子工学科	前期		117	338	2.9	117	291	2.5
	後期		13	98	7.5	13	96	7.4
情報学科	前期		81	155	1.9	81	185	2.3
	後期		9	102	11.3	9	89	9.9
工業化学科	前期		210	538	2.6	210	568	2.7
	後期		25	183	7.3	25	200	8.0
農学部	前期		233	590	2.5	233	670	2.9
	後期		67	703	10.5	67	743	11.1
資源生物科学科	後期		19	168	8.8	19	166	8.7
応用生命科学科	後期		9	114	12.7	9	168	18.7
地域環境工学科	後期		11	108	9.8	11	88	8.0
食料・環境経済学科	後期		9	110	12.2	9	91	10.1
森林科学科	後期		12	159	13.3	12	193	16.1
食品生物科学科	後期		7	44	6.3	7	37	5.3
合計			2,829	12,282	4.3	2,829	12,754	4.5
	前期		2,498	7,188	2.9	2,494	7,595	3.0
	後期		331	5,094	15.4	335	5,159	15.4

《注》法学部（後期日程）と経済学部（後期日程）は，外国学校出身者のための選考の募集人員20名以内と10名以内とを除く。

平成17年度概算要求内示概要

新規要求

1．医学研究科（専攻の設置）　医科学専攻　博士後期課程　10人

2．特別教育研究経費

概算要求区分	部局名	事項（事業）名
研究推進	工学研究科・工学部	桂キャンパスにおける研究・教育活動の環境負荷の低減化事業
	化学研究所	超臨界二酸化炭素ナノポーラスエラストマー創製事業
	再生医科学研究所	再生医科学研究所附属幹細胞医学研究センターにおける，新たなES細胞（臨床応用用ES細胞）樹立のプロジェクト研究
	化学研究所	物質合成研究拠点機関連携事業（名古屋大学，九州大学）
	防災研究所	地震火山噴火予知計画研究事業
	ウイルス研究所	新興・再興ウイルス感染克服研究連携事業（北海道大学，帯広畜産大学，東京大学，岐阜大学，滋賀医科大学，大阪大学，鳥取大学，長崎大学，九州大学）
	医学部附属病院	重症心不全への細胞移植プロジェクト
	医学部附属病院	チオレドキシンプロジェクト
拠点形成	生存圏研究所	生存圏科学ミッションの全国・国際共同利用研究拠点形成
	防災研究所	災害に関する学理と防災の総合的対策のための研究推進事業
	基礎物理学研究所	基礎物理学分野横断型全国共同研究
	数理解析研究所	無限解析共同研究
	原子炉実験所	原子力科学の先導的な応用分野の開拓
	霊長類研究所	霊長類の生物学的特性の学際的研究
	放射線生物研究センター	放射線生物学研究の推進拠点
	生態学研究センター	生態学における共同研究
連携融合事業	医学研究科・医学部	ポストゲノム研究の国際共同研究事業
	経済研究所	先端政策分析連携推進機構の設置
特別支援	低温物質科学研究センター	極低温設備

入学定員の改訂

1．学部学生

総合人間学部　△10人［入学定員の減］

理学部　10人［入学定員の増］

学年進行分

1．学年進行教員相当数　7人

地球環境学研究部・教育部　2人（16年度からの繰延戻し分）

医学部・保健学科　5人（16年度からの繰延戻し分）

部局の動き

寄附講座「免疫ゲノム医学講座」の設置

4月1日から，大学院医学研究科に寄附講座「免疫ゲノム医学講座」が設置されることになった。

その概要は，下記のとおりである。

1　部局名　大学院医学研究科
2　名　　称　免疫ゲノム医学講座
3　寄附者　小野薬品工業株式会社
4　寄附金額　総額　2億5千万円（分割納付）
5　設置期間　平成17年4月1日～平成22年3月31日
6　担当教員　教授相当　本庶　佑
講師相当　長岡　仁
講師相当　新藏礼子
7　研究目的　免疫系における遺伝子変異機構とその制御についての基礎研究ならびに免疫系制御因子を用いた各種疾病の新しい治療法の研究を行う。
8　研究内容　免疫細胞生物学，ゲノム医学研究センター，血液内科，移植免疫学，臨床免疫学ならびに臨床各科の腫瘍治療プロジェクトと連携して，免疫ゲノム医学の基礎的な研究を行うと同時に，免疫制御物資の臨床応用を目指した免疫ゲノム医学研究の中心的な内容について大学院レベルの教育を行う。
9　研究課題
・免疫を特徴づける遺伝子変異に基づいた抗体遺伝子多様化機構の解明
・免疫系の負の制御因子ＰＤ－１に関する研究
・分子レベルでの免疫応答の制御，抗体の多様化機構，サイトカインの機能ならびにゲノムの不安定化に関する基礎研究

森・里・海の再生教育に関するフィールド研と全日空の連携
ー大空に舞う森里海連環学ー

フィールド科学教育研究センター（フィールド研）は，21世紀型の新たな統合学問領域“森里海連環学”を提唱し，平成15年4月より全学共同利用施設としてフィールドベースの全学共通教育や研究を展開している。地球生命体の循環系や免疫系としての森と里（川）と海のつながりの再生には，つながりの科学としての森里海連環学の創生とともに，すでに世論を動かし始めている森と海を一体の存在としてとらえる社会的運動との効果的な連携が不可欠と考えられる。こうした考えの下に，平成16年6月～8月に総合博物館春季企画展「森と里と海のつながり－京大フィールド研の挑戦」を行い，7月には時計台百周年記念ホールにおいて対話集会「森と里と海のつながり－“心に森”を築く」を開催し，新しい科学の誕生とその社会的意義を広く市民に訴えた。

これらの取り組みを通じて，大学がどのように社会に開かれた存在として脱皮するかに注目している団体や個人から様々な反響が寄せられ，その一つが

今日のフィールド研と全日本空輸株式会社（ANA）の間で「森・里・海の環境再生教育に関する合意書」の締結として具体化した。ANAは環境・社会貢献部が中心となって，全国の関連空港近隣に10年計画の森づくりを進め，「私の青空・森づくり」運動を昨年より展開している。この催しの青空教室にフィールド研の教員が講師として招かれていたことがきっかけとなり，今後より多様な共同事業を実施するために，組織としての調印を行うこと

となった。主な合意内容は，1）フィールド研はANAの森づくりに協力し，青空塾を開講する，2）ANAはフィールド研が全国に持つ施設の開放を支援する，3）両者は共同でエコツアー（フィールドツアー）を企画開発する，4）ANAはフィールド研が進める森里海連環学に関する市民参加型研究を支援する，の4点である。

フィールド研として，この合意書の締結に当たり特に期待していることは，日本の自然から発想した地球環境問題解決のブレークスルーになり得る森里海連環学を世界に発信したいとの思いと展望は，世界へ翼を広げるANAのイメージや展開と共鳴し，新たな連携効果が期待できる点である。同時に，森里海の連環やそれらの分断は空から見れば一目瞭然であり，今後ANAの空のエキスパートの皆さんの協力を得て，市民参加型研究を空と地上の両面から進められることを期待している。フィールド研は，平成17年より本格的に和歌山県熊野の森－古座川－串本湾をモデルフィールドにした「古座川プロジェクト」を展開しようとしている。全学共通教育，市民教育，連環学研究，古座川町等との地域連携等を包含した統合型プロジェクトの展開に，このANAとの連携は大きな役割を果たすものと思われる。これらの主要な取り組みは，90万部近く発行されているANA機内誌に掲載され，そこから新たな環の広がりが期待される。

詳細はホームページをご覧ください。

http://www.fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/

（フィールド科学教育研究センター）

エネルギー系21世紀COEプログラムとタイ王国連合大学院大学・関係協力大学との合同による「持続可能なエネルギーと環境（ＳＥＥ）に関する国際会議」を開催

平成16年12月1日～3日の間，タイ王国のホアフィンにて「持続可能なエネルギーと環境（ＳＥＥ：Sustainable Energy and Environment）に関する国際会議」が開催された。この国際会議は，日本側の本学のエネルギー系21世紀COEプログラム「環境調和型エネルギーの研究拠点形成」の構成部局であるエネルギー科学研究科，エネルギー理工学研究所，生存圏研究所とタイ王国側の連合大学院大学・関係協力大学との合同によって実施された。また本会議は，アジア環太平洋地域のエネルギー安全保障および環境の改善に貢献するために持続可能なエネルギーとその関連最先端技術の状況を国際的な見地から総合的に討議し，地域全体のエネルギー・環境分野での国際的な研究連携を図ることを目的として開催された。

開催初日の基調講演において，日本側からは辻文三副学長が本学の教育・研究の取り組み状況を紹介するとともに，エネルギー系21世紀ＣＯＥプログラムについて講演を行った。その後，タイ王国エネルギー省のプロミン・レルツリディエ大臣がタイ王国のエネルギー戦略と地域協力の機会についての講演のなかで，日本側の代表機関である本学とタイ王国の連合大学院大学他関係協力大学との今後の国際的な研究協力の促進に期待が寄せられた。その後，4会議場に分かれ各セッションが実施され3日間におよぶ活発な研究討議の後，日タイのエネルギー・環境分野での一層の研究協力体制を構築することの重要性が確認された。

（エネルギー科学研究科，エネルギー理工学研究所，生存圏研究所）

辻副学長の基調講演

開会宣言（SEE組織委員長）

エネルギー理工学研究所が「量子光・加速粒子総合工学研究棟」を開所

エネルギー理工学研究所では，エネルギーの生成，変換，利用の高度化研究を推進するため，「量子光・加速粒子総合工学研究棟」の整備を進めてきたが，この度，平成16年12月９日（木）に辻文三副学長，須藤　滋核融合科学研究所副所長，野城　清大阪大学接合科学研究所長をはじめ学内外から多くの関係者を迎えて開所式を挙行した。

研究棟概略図

開所式では，香山晃教授，山嵜鉄夫教授によって，同研究棟に設置された本研究所の中核的実験装置である，複合ビーム材料照射装置（DuET），マルチスケール材料評価基盤設備（MUSTER）および自由電子レーザー発生装置（KUFEL）の概要説明が行われた。

また，Kwang-JeKim 米国アルゴンヌ国立研究所副所長および木下智見九州大学産学連携センター特任教授により，当該研究分野に関する記念講演が行われた。

なお，同研究棟は，日本における核融合研究の象徴的な存在である旧ヘリオトロンＤ棟の大規模な改装によりこの度整備されたものであり，エネルギー理工学研究所所員他関係者は，エネルギー理工学研究分野の今後の飛躍的な発展に向けて決意を新たにした。（詳細はhttp://www.iae.kyoto-u.ac.jpを参照されたい。）

（エネルギー理工学研究所）

第４回京都大学 COE「元素科学」国際シンポジウム（兼第２回元素科学国際研究センター国際シンポジウム）を開催

文部科学省科学研究費補助金・特別推進研究（COE）京都大学 COE「元素科学研究拠点」（元素科学：元素の特性を活かした有機・無機構造体の構築，研究プロジェクトリーダー：玉尾皓平化学研究所教授）では，１月６日（木）～７日（金）にわたり，時計台記念館にて第４回京都大学 COE「元素科学」国際シンポジウム（兼第２回元素科学国際研究センター国際シンポジウム）（世話人代表：時任宣博化学研究所教授）を開催した。

今回のシンポジウムでは，「元素選択則と物質科学」を主テーマとし，R.H.Grubbs カリフォルニア工科大学教授（先駆的有機合成反応開発），K.Müllen マックス・プランク高分子研究所教授（機能性有機π電子系化合物化学），F.Wudl カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授（高次機能付加高分子化学）による基調講演に加えて，関連分野をリードする国内外の10名の研究者による招待講演，本研究メンバーの研究室の若手研究者３名および化学研究所附属元素科学国際研究センターのメンバー４名による成果発表，そして80件のポスター発表が行われた。参加者は300名を越え，１日目，２日目ともに午前９時過ぎから午後６時過ぎまで最先端の研究成果の発表と活発な討論が行われた。また２日目の最後には，玉尾研究リーダーから，５年間にわたる本特別推進研究（COE）の研究成果の総括とともに，本研究の中から提案された幾つかの「元素選択則」が紹介され，「元素科学」が物質創製研究の新しいコンセプトとして定着することへの期待の言葉をもって本国際シンポジウムが締めくくられた。

（化学研究所）

寸言

バーミヤーンの大佛像の再建はなるか

岩崎　好規

私は，中央アジアのアフガニスタンにあるバーミヤーン渓谷の文化遺産の修復事業にユネスコエキスパート（地盤工学）として参加している。

2001年３月バーミヤーンの大佛がタリーバンの偶像破壊令によって爆破された。

日本国政府は，アフガニスタン復興協力の柱として，世界文化遺産修復日本信託ユネスコ基金による遺産修復事業を策定し，（独）文化財研究所が中心となって実施し，壁画修復については，前田耕作和光大学名誉教授が指導している。

日本による学術調査は戦後本格化し，京都大学，名古屋大学，および成城大学などが実施した。京都大学中央アジア学術調査隊は1970年から開始されソ連による侵攻で79年に中止された。当時の樋口隆康文学部教授（考古学：現奈良県立橿原考古学研究所長）を中心に，バーミヤーン石窟の全部の構造を調査し，石窟番号を打ち（740窟），大佛立像や石窟などの写真や測量などを含む本格的学術調査を実施し，その成果を４冊の大報告書として出版した。（その一部は京都大學人文科學研究所附屬漢字情報研究センターの西域行記データベースで公開され（http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~saiiki/）ている。）名古屋大学と成城大学は主として壁画の調査研究を行った。大佛は比高約150mの岩壁に38mと55mの高さの２体の立像が壁龕とよばれる岩盤ドームに納まっていた。岩盤はよく固結した砂礫岩の水平層でシーム状にシルト岩を挟んでいる。砂礫岩やシルト岩は，ともにコンクリート程度の強度はあるが，シルト岩は浸水により容易に崩壊するという特性を有する。

爆破された仏像は大小の岩塊となってドーム下に数メートルの高さで埋もれていた。ほぼ，仏像は破壊され，壁龕の壁は立像を髣髴とさせるシルエットが亡霊のように浮かんでいる。既存の亀裂に加えて，爆破による影響で複雑骨折的とでもいえるような状況にある。

修復のためにバーミヤーン救済ユネスコ専門委員会（Expert Committee）と国際調整委員会ICC（International Coordinating Committee）（事務局ユネスコ）がある。専門委員会では，考古，美術，岩石，保存などの多分野の専門家が集まって，調査・修復作業を議論している。作風などから６－８世紀の年代とされていたが，破壊された佛像の破片にあった“わら”などのC14分析から東大佛は紀元507±12年，西大佛は551±15年という年代が昨年12月の専門家委員会で報告された。破壊によって知見は進んだことも事実である。

現在は岩盤表面を削孔し鋼線を入れてモルタルで注入固定するという（ロックアンカー工）対策を実施し，まず壁龕の安定化を進めている状況にある。

バーミヤーンの保存運動を進める平山郁夫東京芸術大学学長の提言によれば“原爆ドームと同じように，バーミヤーンは負の遺産としてそのままとし佛像の再建はしない”という。

樋口先生は，“奈良の大仏も，決して当初のままではない。現在の胴体は室町時代の作であり，頭部は江戸時代のものである。にもかかわらず，多くの参拝者が訪れている。文化遺産は活用しなければ意味がない。崩壊にも破壊にもめげずに，それらを再現して人類の知的活動の資源とすべきであろう。”として，再建説の立場にある。

ユネスコ専門委員会の委員長のペチェット氏は，ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）の会長職にあるが，「ドイツでは都市破壊がされたあと，再建保存している」という例を挙げながら，再建説の立場にある。破砕片を集めて，大佛のあった前面に寝仏の形で保存しようと計画中である。

壁龕だけは残すという負の遺産説と大佛再建説との議論は続いているが，現地のアフガニスタンの人々の多くは，ぜひ再建したいといっている。

遺跡は，その“実在”と“なぜそこにそのようなものがあるのか”という理解を超える現実との乖離が空想をかき立てる。その妖しいロマン性に多くの人は魅了されてしまうのである。私も例外ではない。

（いわさき　よしのり：（財）地域地盤環境研究所常務理事　1964年理学部卒業，Ph.D., 博士（工学））

随想

現代確率論の発展を振り返って

名誉教授　渡辺　信三

2005年の新春にこの随想を書いているが，年の暮れから新年にかけては，年末宝くじや歳末商戦につきものの景品付きくじ引き，あるいはサイコロを振ったり，カードをめくって楽しむ種々の遊び，等々，偶然によって福のもたらされる色々な行事で賑やかなことである。また，大勢の人が海外へ出かけるが，ラスベガスとかモンテカルロで好運を求めて遊び興ずる人も多いことだろう。古今東西を問わず，偶然は人々に悲喜こもごもの興奮をもたらす。そうして人々は，こうした偶然性の体験において，確率というものを実感する。

自然界や社会における種々の偶然性や偶然現象を数学的に解明することを目的として，確率論という数学の分野が生まれ発展した。私は，1956年，京大理学部数学科の３年生の時から今日まで，確率論の学習と研究に従事してきたが，この時に始めて恩師である伊藤清先生に出会い，先生の指導と影響のもとに研究を続けることが出来た。これは私の一生にとっての最大の幸運であったことを身に沁みて感じている。

確率論の興りは，17世紀のフランスで二人の大数学者，Pascal と Fermat が，賭け事に関する問題を手紙をやりとりして議論した，その往復書簡であるとされている。その後，Laplace において頂点に達した古典確率論が，近代諸科学の発展に伴い，Laplace の束縛から解き放たれて，近代確率論に生まれ変わるのは20世紀の始めであった。伊藤先生こそ，この近代確率論において，その創始者であり先駆者でもある Kolmogorov, Lévy, Wiener 達の仕事を引継ぎ，その発展に決定的な貢献をされた第一人者の一人である。先生が創始された理論は，“伊藤の確率解析学”の名のもとに今日の確率論の一つの中核になっている。今年の夏には，大数学者 Abel を生んだノルウエーで，第2回アーベルシンポジウムとして，“Stochastic Analysis and Applications, A Symposium in honor of Kiyoshi Itô”という国際学会が企画されている。

確率論をよく学んだからといって，偶然の支配するゲームで得をすることが多いということは全くない。むしろ，確率論の目的は，公平なゲームにおいては，そのような機会が決して存在しないことを，数学原理として理論的に確立することにある。今日の確率解析学では，米国の偉大な数学者，J.L.Doob によって確立されたマルチンゲールの理論が，その基本的方法になっている。マルチンゲールとは，公平なゲームの数学的模型のことであるが，その理論における基本定理の一つは，マルチンゲールに対し，マルチンゲール変換というある種の変換を施すとき，マルチンゲールという性格が保存される，即ち，公平なゲームは，どういう戦略を施しても，それが公平であるという性格を変えることは出来ない，という形で述べられる。マルチンゲール変換は，マルチンゲールに対するある種の積分変換であって，連続時間モデルにおいては，“確率積分”という，伊藤先生によって導入され，確率解析学で基本となる概念と一致する。そもそも，マルチンゲールとは，コイン投げに賭ける方法の一つである“倍賭けゲーム”の呼び名であって，それはマルチンゲール変換の代表例でもある。

マルチンゲール理論を確率解析学の基本的方法として導入したのは，1967年の国田寛氏と私の共同論文と，ほぼ同時期のフランスの P.A.Meyer の一連の論文であり，それで伊藤理論は一般的に整備拡充された。このように，現代確率論の発展に大きく貢献した Meyer は2003年に，Doob は2004年に亡くなった。偉大な先人の業績を受け継いで，確率論は今も発展し続けている。

（わたなべ　しんぞう　元理学研究科教授　専門：数学，確率論）

洛書

フィールドワークのアップデート

杉島敬志

民主化，地方分権化に向かって大きく動き出したスハルト政権崩壊後のインドネシアでは，海外からの援助資金が直接，地域社会に投下されるケースが急増した。1983年以来，調査をつづけてきたインドネシア，フローレス島中部の山村にも，そうした援助資金によって，いくつかのプロジェクトが実施されてきた。

数年前のことである。ある外国の援助機関から便器，セメント，パイプ，波トタンなどが村人たちに無償で供与された。それらを使ってトイレを作ってもらい，衛生環境の向上を図ることが目的であった。だが，あろうことか，トイレの設置を約束した村人たちの多くが，もらい受けた材料を都市部の知り合いに売り払ってしまった。

スハルト政権時代からトイレの設置は，公衆衛生政策の一環として，各行政村に強く求められていた。だが，都市部を除き，その数は順調には増加しなかった。その理由のひとつは，それが必ずしも必要ではないことにある。村の周囲には森が広がっている。また，そこで用を足すことは非衛生的とも，悲惨とも決めつけられない。排泄物は――どうして知るのだろう――あとをつけてくる豚や犬がたちどころに始末してくれる。くわえて，なれてしまえば――雨や下痢にみまわれないかぎり――一抹の爽快ささえ感じられるようになる（もっとも，つらさ，しんどさが消えてしまうわけではないが）。

また，もうひとつの理由は，羞恥心や不快感といったトイレに付随する心理的抵抗感である。村人たちは私たち以上にトイレの臭いや不潔さを嫌悪する。また，とくに女性にいえることだが，たとえ目の前にあっても，多くの村人はトイレを使わないか，その使用を人にさとられないようにしている。近くから人の話し声が聞こえ，隙間からあたりの様子がうかがえるトイレに座っている状況を想像されたい。私なら森を選びたくなる。

こうしたいわば身体化された他者理解にもとづいて，古参のフィールドワーカーは上記のような開発援助の不首尾を冷笑したくなる。また，計画段階における住民参加の強化や地域研究者の果たすべき役割の重要性を主張したくなる・・・しかし・・・身体化された他者理解とやらを，私はいつ会得したのだろう。それは，遠い昔，かれこれ20年も前におこなった院生時代のフィールドワークに由来する。

就職後も，私は院生時代とおなじ地域で調査を続けてきた。しかし，20年の間には十分にフォローしきれなかった多くの変化がおこった。これまで述べてきたこととの関連でいえば，都市部との往来が急増し，村落部への都市的な生活様式の流入が急速に進んだ。頓挫したトイレ設置のプロジェクトについて長々と語ってくれた行政村長は，森での用の足し方を指南してくれた20年前の若者ではなく，今ではトイレ以外での用足しを嫌う人間になっている。

身体化されることで，フィールドワーカーは自分の他者理解に確信を深める。だが，身体化されているために，それは意外なほど自己保全的であり，アップデートを怠ると，たちまち調査地の現状とはかけ離れた権威主義的な妄信となる。これは老人が若者の言葉づかいに反発する事態と何ほどか似ている。老人にはそうする権利がある。だが，フィールドワーカーには時代の切っ先にとどまることが求められるのである。

（すぎしま　たかし　アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

栄誉

林　巳奈夫名誉教授，奥田昌道名誉教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび，林　巳奈夫名誉教授，奥田昌道名誉教授が日本学士院会員に選ばれました。
以下に両名誉教授の略歴，業績を紹介します。

林　巳奈夫名誉教授は，昭和25年に京都大学文学部史学科を卒業，同大学大学院文学研究科研究奨学生，(株) 平凡社編集部を経て，同32年京都大学人文科学研究所助手となり，同43年助教授，同50年教授に就任，平成元年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

林名誉教授は，中国考古学と古典籍に対する深い学殖に加え，図像学・民族学・動物学などの新しい方法を用いた実証的研究によって，東洋学の多くの分野において数々の顕著な業績をあげてきた。第１に，中国古代文明を特徴づける青銅器や玉器について，中国・日本・欧米の収蔵品を再発掘するとともに，その精細な観察を積み重ね，細緻にして体系的な編年を確立した。新出の甲骨・金文を活用することによって検証されたその編年体系は，考古学はもとより古文字を研究する文献史学の分野でも信頼できる基準として広く受けいれられている。第２に，紀元前２千年紀後半の殷代に出現する馬と馬車について，発掘された馬骨や青銅製車馬具，古典籍や甲骨・金文の分析を軸に，欧米における動物学・民族学の成果と中央アジアにおける遺跡調査の経験とを生かした分析を進め，汎ユーラシア的な観点から中国の古代文明を世界の文明史の流れの中に再措定することに成功した。第３に，支配者層から庶民にいたる生活の諸相や神話的世界を表現した画像石・壁画・鏡などについて，写真や拓本では読みとりにくい特徴を透徹した観察眼で線画に描き起こし，図像の姿態や配置を精密に分析する新しい図像学の手法を開拓するとともに，古代の生活史・精神史の分野で先導的な役割を果たしてきた。いくつかの著作は英語や中国語にも翻訳され，広く国際的に反響を呼んでいる。第４に，青銅器の器形・文様・銘文を総合的に分析するための目録や，古代の生活と風俗の諸相を網羅した文物図典の編纂は，考古学のみならず文献史学や民俗学の分野における研究の基礎条件を整備したものとして，国内外できわめて高く評価されている。

これらの業績に対し，昭和60年日本学士院賞，同年にはドイツ考古学協会海外会員に選出せられ，平成７年には勲三等旭日中綬章を授けられている。

（人文科学研究所）

奥田昌道名誉教授は，昭和30年京都大学法学部を卒業し，同年同大学法学部助手，同32年講師，同33年助教授を経て，同45年教授に就任（民法講座担任）し，平成４年大学院法学研究科教授（民事法講座担任）に配置換えとなり，平成８年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。その間昭和58年より２年間法学部長を務められた。退官後は平成８年鈴鹿国際大学国際関係学部教授，同10年同大学大学院国際学研究科長併任となった後，同11年４月最高裁判所判事に就任し，同14年９月に退官された。平成14年10月同志社大学法学部教授に就任し，平成16年同大学法科大学院教授となり，現在に至っている。この間，日本私法学会，比較法学会，日独法学会の要職を歴任された。また，法制審議会委員として立法にも貢献された。

奥田名誉教授の研究は，民法の主要領域のほとんどすべてに及ぶが，最大の業績は民法と民事訴訟法

の基礎となる「請求権」概念の研究である。同名誉教授は，一連の論文によって，日本の民法および民事訴訟法の立法と学説形成に重大な影響を与えたドイツ法の精密な分析を行った。19世紀のドイツ普通法学，ドイツ民法制定期またその後の学説発展の歴史的研究を通して，市民の権利の体系（民法＝実体法）とその保護・貫徹のための手法（民事訴訟法＝手続法）の体系的分化の全体像が提示され，二つの法の有機的な連関を請求権概念の内容と機能を分析することによって，明確な像に結晶させて提示した。この研究は，戦後の民法学の最も重要な成果の一つである。

奥田名誉教授は，さらに請求権論の研究を発展させ，請求権二重構造説と呼ばれる請求権競合論，契約法と不法行為の競合領域における債権構造論，安全配慮義務論等においても，法学の伝統を踏まえ，また社会の変化に対応した法理論を展開し，民法学の発展に大きく寄与するとともに，裁判を通して生ずる法形成にも影響を及ぼした。また，著名な『債権総論』は，判例・学説の到達点を提示するに止まらず，民事訴訟・執行との関連づけを行った民法理論の展開により，債権法総論の理論水準を高めたと高く評価されている。

（大学院法学研究科）

中川久定名誉教授がフランス共和国レジオン・ドヌール勲章シュバリエ級を受章

中川久定名誉教授が平成16年6月4日フランス政府からレジオン・ドヌール勲章シュバリエ級を叙され，同12月17日に関西日仏学館で，ベルナール・ド・モンフェラン駐日フランス大使臨席のもと，叙勲式が執り行われた。レジオン・ドヌール勲章は1802年にナポレオン・ボナパルトによって創設された最高の栄誉をしめす由緒ある勲章である。

中川名誉教授は，昭和29年京都大学文学部文学科を卒業，同31年同大学院文学研究科修士課程を修了，同年4月博士課程進学の後，名古屋大学助教授を経て，同46年京都大学文学部助教授，同55年同教授に就任し，評議員，文学部長を歴任され，平成6年3月停年退官，名誉教授の称号を受けられた。退官後は近畿大学教授，京都国立博物館館長などを務められた。現在でも，日本学士院会員，国際高等研究所副所長などを兼任され，わが国の学術分野の第一線で活躍されている。

同名誉教授は昭和42年に辰野賞（日本フランス語フランス文学会），同60年パルム・アカデミック勲章オフィシエ級（フランス共和国），平成5年京都新聞文化賞など数々の栄誉を受けてこられた。

専門は18世紀フランスの文学と思想，とりわけディドロおよびルソーの研究である。同名誉教授の関心は，哲学，政治思想，小説，演劇，紀行文など広い分野に及び，厳密なテクスト批評と実証的調査に基づいた正統的な研究方法に加えて，精神分析，歴史学，比較文学，構造分析など新しい学問手法を積極的に取り入れて，規模の大きい研究の数々を国内外で発表し，国際舞台で長期にわたり活躍されてきた。

研究，翻訳，辞書編纂，校訂，など多岐にわたる分野で同名誉教授はわが国における主導的な役割をはたされ，その研究水準を高めるのに絶大な功績をあげてこられた。また国際シンポジウムをたびたび企画し主宰されたことも特筆に値する。同名誉教授の打ち立てた新しい伝統の中から，次世代を担う優秀な研究者が多く輩出されている。

このたびの叙勲は同名誉教授のこのような学問的寄与とともに，それと不可分の関係にある国際交流，とりわけ日本とフランスの学術文化交流における実績を高く評価されたものである。

（大学院文学研究科）

資料

平成16年度　総長裁量経費による研究課題

本年度の総長裁量経費については，下記の31件が採択されました。
採択された研究課題及び代表者等は次のとおりです。

プロジェクト課題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部局
専門職大学院の設置による法学部における法学教育の再編	法学研究科 教授　村中孝史	
ビジネス科学コースのための教材作成（業績不振の経営体再生のための戦略策定）	経済学研究科 教授　西村周三	
情報社会における知的財産教育プログラム	情報学研究科 教授　田中克己	国際融合・メディア・知財企画室
京都大学における朝鮮・韓国学教育・研究ネットワークの構築	人文科学研究所 教授　水野直樹	文・経・教・人環
全学共通科目の学習に必要とする学生用図書及び大学院生の研究を支援する基本図書の充実整備	附属図書館 教授　佐々木丞平	全学部
留学生の科目履修のための情報資料提供	附属図書館 教授　佐々木丞平	全学部
救急蘇生法の普及	医学部附属病院 看護部長　嶋森好子	
教育用計算機システム端末室開館時間延長の実施方法調査	学術情報メディアセンター 教授　喜多　一	
労働安全衛生管理に関する教育ビデオの作製	環境保全センター 教授　高月　紘	工・施設
少人数教育における IBL の評価方法の開発	医学部（保健学科） 教授　稲本　俊	
全学共通教育教務情報システム（KULASIS）の構築	高等教育研究開発推進機構 機構長　丸山正樹	高等教育セ・人環
全学共通科目授業内容の質的改善に向けた重点的取り組み	高等教育研究開発推進機構 機構長　丸山正樹	企画部
広報活動の充実に向けた学外広報誌の発行等について	広報委員会 委員長　本間政雄	
京都大学ジュニアキャンパス	理事　東山紘久	
Open Course Ware at Kyoto University プロジェクト	学術情報メディアセンター 教授　美濃導彦	メディア
電子認証導入のための調査	情報環境部 企画管理課長　松下彰良	メディア
国際教育プログラム（KUINEP）の充実	留学生センター センター長　田村　武	文　他
京都大学経済学研究科上海センター（現代中国経済研究）プロジェクト	経済学研究科 教授　下谷政弘	農・経研・東南研・留学セ
遠隔講義システムを活用した双方向型地球科学リアルタイム・フィールド教育の展開	理学研究科 教授　淡路敏之	生存研・防災
医科学専攻博士後期課程教育研究環境整備プロジェクト	医学研究科 教授　本庶　佑	工・再生研・ウイ研・放生研・保管セ
生存圏研究所の全国共同利用体制の整備とミッション推進	生存圏研究所 教授　松本　紘	
データベース化に向けた京都大学自然史未整理資料の整理	総合博物館 教授　中坊徹次	人環・理・農・生態・フィールド
新センター構想の検討会	企画部 部長　松本次好	学内心理学関連部局
「専門的教養知」の働きとその養成に関する革新的・基礎的研究	教育学研究科 教授　藤原勝紀	
内陸地震の発生の仕組みの解明	防災研究所 教授　大志万直人	
革新的有機半導体デバイスの動作機構解明に関する基礎的研究	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー 施設長　松重和美	
ダークマター・アクシオンの探索	低温物質科学研究センター 教授　水崎隆雄	ＲＩ・化研・理
京都大学における「学徒出陣」に関する調査・研究	大学文書館 館長　佐々木丞平	
文学研究科所蔵　写本・拓本の有効利用	文学研究科 教授　服部良久	
京都大学の知の活用～京大 IIC フェア開催と調査研究～	国際融合創造センター 教授　松重和美	知的財産企画室・ＶＢＬ・「医学領域」産学連携推進機構
アフリカ地域研究電子化資料の活用：研究成果の社会還元のためのインターフェイス構築	アフリカ地域研究資料センター 教授　荒木　茂	

話題

京都大学未来フォーラム（第８回，第９回）を開催

京都大学では，恒例となった様々な分野で活躍する本学卒業生「ＯＢ・ＯＧ」を迎えて，講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムの第８回目を平成16年12月20日（月），第９回目を12月22日（水）の夕刻に，時計台記念館百周年記念ホールにおいて開催した。

第８回目は，医学部を卒業され，現在は聖路加国際病院理事長･名誉委員長，聖路加看護大学理事長･名誉学長で文化功労者として活躍されている日野原重明先生を講師に招き，医学部附属病院長の田中紘一教授の司会で，「日本の研究・教育・医療システムの過去と現在と将来－外から見た京都大学」と題して講演が行われた。

講演では，大学の使命は①文化を伝えること，②Profession（職業）の教育，③科学的研究や新しい科学者の養成にあると述べられ，新しい知見を生み出すには学際的な研究者の交流が重要で，そこでは新たな発想へのヒントが得られることを強調された。医者の心理には，科学の心と愛情の２つがあり，それを見分けることが良い医者を見つける方法であることや，健康で長生きするコツとしては将来への目標を持って生きることが大切であり，そのためには自身の生活を整えていくことが必要で，75歳からが新老人であると述べられた。また，若い研究者に対し自由に研究ができる豊かな環境を整えることや，研究者には偶然のことにも注視すること，組織運営においても大学全体が１つの目標を持って進んでいくことが大事であることを，自らの豊富な経験をもとにユーモアをまじえながら語りかけるように話された。約400名の参加者はメモを取りながら真剣に聞き入っていた。

第９回目は，法学部を卒業され，現在は日本国政府ユネスコ代表部特命全権大使として活躍され，2002年にフランス政府より国家功労勲章オフィシェを受章されている佐藤禎一氏を講師に招き，本間政雄副学長の司会で，「国際機関の未来（ユネスコ活動を中心に）」と題して講演が行われた。

講演では，1945年ロンドンにおいてユネスコ憲章が採択されて以降，世界に対してユネスコ活動が果している役割や，その中での日本の立場などが紹介されるとともに，国家を基礎単位としない活動が増加してきている現状についても紹介があった。また，初代の特命全権大使として赴任された後のユネスコ改革の推進や邦人職員の活躍ぶりなどが紹介され，ユネスコでは臨機の対応が求められる場面やスリリングなこともあるが，やりがいのある仕事であり，優秀な人材を公募しているので意欲のある方はぜひチャレンジしてほしいと語りかけられた。約260名の参加者は佐藤大使の実例をもとにした話に真剣に聞き入っていた。講演後の質疑応答では，本学学生等から世界文化遺産の登録，NGO 組織との協力，途上国への支援などについて質問があり，活発な意見交換が行われた。

訃報

このたび，北村李軒（きたむら りけん）名誉教授，網田富士嗣（あみた ふじつぐ）理学研究科技術専門員，石井象二郎（いしい しょうじろう）名誉教授，浮田典良（うきた つねよし）名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴，業績等を紹介します。

北村　李軒　名誉教授

北村李軒先生は平成16年12月８日逝去された。享年82。

先生は，昭和21年京都帝国大学医学部医学科を卒業，同大学医学部附属医院副手，医員，助手，講師，助教授を経て同51年同大学保健管理センターの教授に就任，内科学を担当された。昭和61年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間，保健診療所長および保健管理センター所長を歴任され，学生や教職員の診療のみならず，心身の健康の保持増進と疾病の予防等の保健管理にも情熱をかたむけてこられた。

研究面においては，その著書『現代健康学』，『学校保健の情報科学』，『学校病を中心とした保健管理』に見られるがごとく，また，数々の発表論文についても，学校保健の観点から集団健診の実際について指針を確立された。

また，教育面では，疾病の早期発見や早期治療を通じた予防医学，保健医学，健康増進医学分野への情熱と識見に立脚した健康教育学の講義は，学識と円満な人柄と相まって学生に深い感銘をあたえた。また，他大学の保健管理センターからの信任も篤かった。

本学退官後は，武田病院健診センター所長を務めめられた後，平成10年には名誉所長になられ，終生人々の健康に奉仕された。

さらにまた，平成14年には社団法人日本 WHO 協会副会長となられ社会に多大な貢献をされた。

（保健管理センター）

網田　富士嗣　理学研究科技術専門員

網田富士嗣氏は，平成16年12月８日逝去された。享年55。

同氏は昭和45年８月京都大学理学部に採用，平成10年４月には技術専門職員に昇任，平成12年４月には技術専門官に昇任され，平成16年４月には技術専門員に配置換になった。

同氏は，この間，34年にわたり京都大学のみならず諸大学の高圧研究用実験機器の設計・製作を手がけ，高圧化学・物理分野に大きな貢献をしてこられた。その功績により，平成７年には日本化学会から技術有効賞を受賞された。化学教室にあっては，金工室の管理運営，10万気圧アンビルの維持管理，学生実習など，研究支援と研究者育成に多大の貢献をし，その職責を全うされた。

（大学院理学研究科）

石井　象二郎　名誉教授

石井象二郎先生は，平成16年12月10日逝去された。享年89。

先生は，昭和12年東京高等農林学校（現東京農工大学）を卒業，農林省農事試験場昆虫部，佐賀県立農事試験場を経て，京都帝国大学農学部農林化学科に入学された。昭和21年卒業後，農林省農事試験場技官，さらに同病理昆虫部農薬科農業生理化学研究室長を経て，昭和38年京都大学農学部教授に就任され，同附属農薬研究施設農薬影響学部門を担当された。昭和53年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間，昭和46年より同49年まで農学部附属農薬研究施設長としてその管理運営に貢献された。

先生は昆虫生理学，特に昆虫の寄主選択機構と栄養生理に関する研究において優れた研究業績を残され，これらの研究によって日本応用動物学会・日本応用昆虫学会賞及び日本農学賞を受賞された。さらにゴキブリ類，マダラメイガ類のフェロモンに代表される昆虫の生理活性物質と行動に関する研究において，常に先進的で優れた研究業績を残され，内外から高い評価を受けるとともに，その分野の発展に多大な貢献をされた。（主な著書に『昆虫学への招待』，『昆虫生理学』等がある。）

また，日本応用動物昆虫学会，日本昆虫学会，日本農薬学会などにおいて，会長，評議員の要職を歴任され，第16回国際昆虫学会議（京都）組織・大会委員長として，その開催に尽力された。本学退官後は，児童の科学教育にも取り組まれ，『わたしの研究・イラガのマユのなぞ』（第38回産経児童出版文化賞受賞）ほか多くの著書がある。

（大学院農学研究科）

浮田　典良　名誉教授

浮田典良先生は１月12日に逝去された。享年76。

先生は昭和27年京都大学文学部史学科（地理学専攻）を卒業，京都女子高等学校に勤務の後，同28年京都大学分校助手に採用され，同33年大阪府立大学教養部講師，同37年同助教授，同43年京都大学教養部助教授を経て，同47年に同教授に就任された。昭和63年に退職され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間，昭和55年から57年まで評議員，同59年から60年には教養部長を務められ，大学および教養部の管理運営に貢献された。本学退官後は，昭和63年から平成８年まで関西学院大学文学部教授，同年から平成12年まで神戸学院大学人文学部教授として引き続き教鞭をとられた。

先生の専門は人文地理学で，初期の日本農業・農村の歴史地理の研究に続き，大阪府立大学在職中の２年間のドイツ留学の成果をまとめられた主著『北西ドイツ農村の歴史地理学的研究』（大明堂，1970）は，研究の結果はもとより，厳密な地図化の遂行という方法論的な面においても，学界に多大の貢献をした。その後は社会地理学，観光地理学，地図学，ヨーロッパ地誌研究など人文地理学の多分野にわたって多くの著書・論文を刊行され，それらは後学にとってよるべき基準の一つとなっている。

（大学院人間・環境学研究科）

日誌　2004.12.1 ～ 12.31

12月 6 日　役員会
〃　人権に因む研修会
7 日　財務委員会
〃　部局長会議
8 日　能楽鑑賞会
9 日　企画委員会
10日　厚生補導担当教員研究会
11日　学生部委員会
13日　企画委員会
〃　役員会
14日　教育研究評議会
15日　国際交流委員会
16日　図書館協議会
〃　財務委員会
17日　全学共通教育システム委員会
20日　企画委員会
〃　役員会
21日　教育制度委員会
〃　外国人研究者との交歓会
24日　大学入試センター試験実施委員会
〃　「理系基礎基礎教育・実験教育」についてのワークショップ（25日まで）
27日　役員会
〃　財務委員会

お知らせ

河上肇記念シンポジウムと講演

○記念シンポジウム
1．日　時：3月16日（水）　14：00～17：00
2．場　所：時計台記念館百周年記念ホール
中国と日本の政治経済学　－河上肇と中国，その後－
パネル　三田　剛史（経済思想史研究者，『甦る河上肇－近代中国の知の源泉』藤原書店著者）
張　小金（政治経済学，アモイ大学教授）
大西　広（社会統計学，京都大学経済学研究科）
本山　美彦（国際経済論，京都大学経済学研究科）
八木紀一郎（経済学史，京都大学経済学研究科）
山本　裕美（中国経済論，京都大学経済学研究科）

○公　開　講　演　会
1．日　時：3月16日（水）　18：15～20：00
2．場　所：時計台記念館百周年記念ホール（一般公開・当日入場可）　一般来聴歓迎・入場無料
あいさつ　河上肇と京都大学　中野　一新（京都大学名誉教授・河上肇記念会代表）
河上肇と比較経済思想　住谷　一彦（立教大学名誉教授・東京河上会代表）

問い合わせ先：大学院経済学研究科ＣＯＥ補助員室　TEL：753－3452
E-Mail：coe-jimu@econ.kyoto-u.ac.jp　ＵＲＬ：http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/coe21/
主催：京都大学大学院経済学研究科・経済学部
京都大学上海センター
京都大学21世紀 COE プログラム「先端経済分析のインターフェース」

高等教育研究開発推進センター・第11回大学教育研究フォーラム

1．日　　時：平成17年３月22日（火）９：00～16：30／３月23日（水）９：00～16：00
2．場　　所：吉田南１号館・時計台記念館
3．プログラム：

○大会企画フォーラム「大学教育評価ー評価する側の論理ー」　３月22日(火）13：00～16：30

挨　拶	総長	尾池　和夫
主旨説明	高等教育研究開発推進センター教授	大塚　雄作
基調講演	大学評価・学位授与機構・機構長	木村　　孟
話題提供１	大学基準協会大学評価・研究部部長心得	前田　早苗
話題提供２	メディア教育開発センター教授	吉田　　文
話題提供３	文部科学省高等教育局国立大学法人評価委員会室・室長	奈良　　哲
話題提供４	高等教育研究開発推進センター教授	松下　佳代
総　括	高等教育研究開発推進センター教授	林　　哲介

○総括講演１　３月22日（火）10：45～11：45
（１）美濃　導彦（学術情報メディアセンター教授）　「e-Learning をどう利用するか？」
（２）宇佐美　寛（千葉大学名誉教授）　「講義をやめよう」
（３）田口　真奈（メディア教育開発センター助教授）　「FD の現状－日本とアメリカ－」
（４）大塚　雄作（高等教育研究開発推進センター教授）
「大学授業の改善とアカウンタビリティ－授業評価の新たな課題－」

○総括講演２　３月23日（水）11：15～12：15
（５）竹内　　洋（大学院教育学研究科教授）「これからの教養教育－教養教育の没落のあとに－」
（６）髙木　晴夫（慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授）
「ケースメソッド授業の効果と限界－社会人大学院での活用に向けて－」
（７）縄田　裕幸（島根大学教育学部助教授）「授業公開と検討会による FD」
（８）荒井　克弘（東北大学大学院教育学研究科教授）　「高大接続の文脈－学力問題のゆくえ－」

○研究部会・実践交流部会発表
３月22日（火）　9：00～10：30
３月23日（水）　9：00～11：00
FD・授業公開研究部会　　e-Learning・遠隔教育研究部会　　大学生・大学生活研究部会
授業研究部会　　教育評価・カリキュラム研究部会　　ビデオ持参による授業実践報告

○ラウンドテーブル
３月23日（水）13：30～16：00

4．聴　講　料：無料（ただし資料代1,000円）
5．申 し 込 み：必要（詳しくは http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/ をご覧ください。）
6．問い合わせ先：高等教育研究開発推進センター　TEL：753－3087　FAX：753－3045

編集後記

この２年間広報委員として活動してきたが，外部委員になったのは今回が始めてであった。研究所と家の間を往復するのがほとんどのような生活をしていると，周囲の人たちとしか関わりが無く，実は自分が非常に大きな組織の中の一員であることを忘れてしまう。広報委員をしていると，学内の様々な活動の記事を自然と多く目にする。また，広報委員会自体が，教員と事務の間のような役割であり，自然と事務の人たちの仕事も意識する。今回広報委員になって初めて，実は京都大学という巨大で複雑な組織があって，その中には様々な役割を担う人たちがいて，京都大学を盛り立てていっているんだということを実感することができた。この意識にはある種の新鮮な気持ちが含まれ，広報委員になったことは楽しい経験だった。　（笹倉記）